

陳 情	受 理 番 号	112	受 理 年 月 日	令和5年5月12日	付 託 委員会	厚生経済
件 名	首里城正殿の龍頭棟飾（りゅうとうむなかざり）の復元を「壺屋焼」を主体に実現することについて					

首里城正殿の龍頭棟飾（りゅうとうむなかざり）の復元を
「壺屋焼」を主体に実現することについて（陳情）

2019年（令和元年）10月31日未明、首里城正殿内部から発生した火災により正殿を含む建物8棟が焼失しましたが、今、再建に向けて様々な取組みが進められています。

そのような中、焼物（ヤチムン）としての首里城正殿の龍頭棟飾（りゅうとうむなかざり）の復元について、壺屋陶器事業協同組合はその再建に寄与すべく、これまで幾度となく「壺屋焼」を主体に実現させたいと声を上げてまいりました。

そもそも、「壺屋焼」は、1682年に首里王府により知花窯、宝口窯、湧田窯が統合されたことで、現在の壺屋の地に誕生し、その後、御拝領地や御拝領窯を与えられるなど、歴史的に王府と深い関係があったことは周知の事実です。「球陽」によると、1682年の首里城正殿修理の際には、平田典通（ひらたてんつう）が龍頭棟飾を焼物で制作し正殿に飾ったという記録があり、その後、壺屋の陶工たちがその技法である「上焼」を継承し、首里城における装飾品等の製作を担ってきました。

これらの壺屋焼の技法は長い歴史の中で脈々と受け継がれてきており、1976年（昭和51年）に国から伝統的工芸品産業に指定され、1985年に沖縄県で初の重要無形文化財技能保持者（人間国宝）に選ばれた金城次郎を輩出したのも壺屋焼です。さらに、2001年（平成13年）には那覇市指定無形文化財ともなり、現在では多方面からのご支援もいただき、次世代にも受け継がれようとしています。

しかしながら、この度の首里城再建のプロセスで、沖縄県の関係機関・関係者より壺屋焼の陶工には「龍頭棟飾を製作する技術がない」という旨の信じられない発言が飛び出したことは、誠に残念なことであり、これは決して看過出来ません。

このような誤った認識を払拭し、350年に渡る壺屋焼の歴史と陶工たちの技術を改めてご評価いただき、さらに今後の技術継承、人材育成を図る上でも、あくまでも「壺屋焼」が主体となり首里城正殿の龍頭棟飾の復元・制作に携われるよう、沖縄県に働きかけていただきますよう、よろしくお力添えをいただきたく、この度、陳情いたします。首里城正殿完成予定の2026年に向けて今年6月までには制作体制が決定される見通しもあることから、何卒よろしくお願い申し上げます。